

博士学位論文
(要約)

光源氏・浮舟をシテとする能の研究
——『源氏物語』との対比から——

The Study of Noh Appointing Hikarugenji and Ukifune as Protagonists:
In Comparison to *The Tale of Genji*

聖心女子大学大学院
文学研究科・人文学専攻
倉持 長子

【序章】光源氏・浮舟をシテとする能——『源氏物語』と宗教的救済という課題——

『源氏物語』における宗教的救済は、物語に抱え込まれた中心的主題でありながら、登場人物が誰一人として得ることのできなかつた「絶望的な課題」(張龍妹『源氏物語の救済』序、風間書房、2000年)と言われる。光源氏と浮舟は、この問題を最も重く担う人物として物語に登場する。本論文は、『源氏物語』の光源氏・浮舟の宗教的救済に関わる叙述を改めて振り返りつつ、両者の亡霊をシテとし、その救済を描く中世の源氏能〈須磨源氏〉〈浮舟〉〈木霊浮船〉の持つ新たな一面に光を当てることを目的とするものである。

個々の作品をめぐる具体的な検討に入る前に、序章では、まず、源氏能が作られる土壌とも言える、『源氏物語』と宗教的救済の問題が強く結びつけられていた中世の文学・思想的状況を辿り見る。『源氏物語』の作中人物たちの救済を重く扱う源氏能の創出には、源氏供養という中世固有の『源氏物語』の享受の形態が抜き難く関わっている。源氏供養の系譜上に登場する能〈源氏供養〉および御伽草子『花鳥風月』は、『源氏物語』の作中人物の宗教的救済という新しい源氏供養の方向性を指し示すものであった。能〈須磨源氏〉〈浮舟〉〈木霊浮船〉は、こうした『源氏物語』の作中人物の宗教的救済が問題とされる中世の文化的・思想的な流れの中で、光源氏・浮舟の救済を目指して創出されたものと捉えられる。

本論文は、以下に要約するように、『源氏物語』と源氏能の間を往還しつつ考察を加える六つの章と終章から構成されている。考察においては、中世の『源氏物語』享受の世界を踏まえつつも、『源氏物語』本文と能〈須磨源氏〉〈浮舟〉〈木霊浮船〉とを突き合せ、その重なりとずれを炙り出すことで、従来は見落とされてきたシテの救済に関わるさまざまな側面を明らかにする。なお、本論文は、先行する源氏能の作品研究では殆ど顧みられてこなかった、『源氏物語』研究の成果を取り入れたものである。

【第一章】『源氏物語』における宗教的救済——光源氏・浮舟をめぐる——

第一章では、『源氏物語』における光源氏と浮舟の宗教的救済をめぐる研究史を概観し、両者がどのように救済を希求しつつ、そこから遠ざけられているのか、という問題について

て検討する。

正篇の光源氏の思考からは、藤壺との関わりによる「罪」ゆえに出家を志向しつつ、一方に藤壺ゆかりの紫の上を中心とする「絆」や「心まどひ」によってそれを実現できない、という引き裂かれた構造が一貫して見出される。また、この藤壺をめぐる「罪」は、冷泉帝となる皇子の誕生や准太上天皇という地位を彼にもたらず、いわばその栄耀栄華の原点であった。光源氏は栄華の高まりとともに罪障意識を深め、出家遁世の志を強めている。光源氏は多くの美質に溢れ、卓越した人間として描かれる一方で、その宗教的救済をめぐる深い苦悩により、決して人間を超える、その意味で超越的な存在にはなり得ないものとして描かれている。

続篇では、出家を遂げた浮舟に宗教的救済はもたらされるのか、という問題が提起される。浮舟は、薫・匂宮との関係をめぐって憂愁を深め、入水を志したものの救出されてしまう。自死の完遂を妨げられ、不本意ながらも現世を生き抜かなければならなくなった浮舟に唯一残されていた道が、出家であった。

この出家が浮舟を宗教的救済に導く手段であるか否かという問題については、従来見解の分かれてきたところであるが、本論文は、出家は浮舟の救済を約束するものではない、との立場に立つものである。晴れて尼となったにも拘らず、浮舟はその身に深く刻まれた匂宮との愛執や、かつての宇治における薫との思い出と決別できない姿を繰り返し見せることが確認されるためである。しかも、最終的に浮舟が辿りついた「阿弥陀仏」は、浮舟に渴仰されるものではなく、その胸中を覆う昔の思い出を「思ひ紛らは」す程度の信仰対象でしかない。物語において、出家や仏道は、浮舟を愛執から決別させ、宗教的救済に導くものとして描かれることはないと考えられる。

なお、浮舟が救済から隔てられる要因として、現世においては決して捨て去ることのできない浮舟の「女の御身」が生み出す「罪」の問題、およびその「罪」の論理を説く『法華経』提婆達多品の「龍女成仏」の問題についても触れた。『源氏物語』において、浮舟の宗教的救済は幾重にも否定されているというほかない。

上記に述べたような『源氏物語』の光源氏・浮舟の宗教的救済のあり方を踏まえつつ、以下、源氏能におけるシテ光源氏・浮舟の新しい救済の物語の世界へ分け入ることとする。

【第二章】〈須磨源氏〉における「須磨」考

第二章では、能〈須磨源氏〉において舞台とされている「須磨」の意味を明らかにする。

〈須磨源氏〉をめぐるのは、その舞台が「須磨」に設定されていることが大きな問題とされてきた。片山慶次郎氏・島津忠夫氏・村瀬和子氏・前西芳雄氏による「座談会「須磨源氏をめぐる」」（『観世』60-5、1993年5月）では、「舞台を特に須磨に持ってくる必要はあまり無いように思う」との問題提起がなされている。竹本幹夫氏は、〈須磨源氏〉について「〈源氏の謡〉以外には『源氏物語』の物語的構想と関連する部分を持たないのであり、何故舞台を須磨に限定したのか不可解ですらある」（『源氏物語』と謡曲『観阿弥・世阿弥時代の能楽』明治書院、1999年、初出1983年7月）との懐疑を示している。こうした従来の見解に対し、本章は、『源氏物語』との比較を通じて〈須磨源氏〉の舞台とされ

る「須磨」の意味を改めて問い直し、解明するものである。

〈須磨源氏〉の「須磨」は、〈松風〉〈忠度〉〈敦盛〉などの須磨を舞台とする多くの能に見える在原行平・光源氏の流謫の地というイメージよりも、『源氏物語』須磨巻に描かれた、精進潔斎に励む清らかな光源氏が出現する地としてのイメージを大きく取り込んだものである。また、〈須磨源氏〉の後シテ光源氏の像は、須磨においてこうした固有の美を放つ物語の光源氏の姿が、中世の「童男」という枠組みによって捉え直されたものと考えられる。

なお、この「童男」は、観世音菩薩の三十三変化身の一つであり、中世においては弥勒菩薩と合体視される聖徳太子に象徴されるように、仏法と王法の頂点に立つという、強い聖性を持つ存在である。第一章で考察したような、そもそも『源氏物語』の光源氏が抱えていた罪障意識という重く暗い問題を完全に削ぎ落とし、その一方で、須磨という地において刻まれた光源氏の清らかな美しさを掬い上げることにより、〈須磨源氏〉のシテ光源氏は、人間としての苦悩を遥かに超越した、神仏的な存在として生まれ変わったのである。

【第三章】光源氏の王者性——「海人」との関わりから——

第三章では、第二章を補うものとして、『源氏物語』における須磨の地が持つ性格が固有に指し示す、光源氏の王者性について検討する。

『源氏物語』の須磨においては、光源氏と「海人」がその甚だしい身分の違いを越え、直接に邂逅していることが注目される。須磨において、「海人」から「貝」を貢進され、共感関係を結ぶ光源氏からは、古代的な王者としての資質を透かし見ることができる。また、光源氏帰京後も、「海人」は六条院において「鶺鴒」に重ねられ、「鷹飼」とともに改めて光源氏の王者性を証明するものとなっている。『源氏物語』須磨巻の須磨に端を発し、その後も物語において継続される光源氏と「海人」の関わりは、光源氏の王者性を証し立てる一側面としての意味を持つのである。

【第四章】〈浮舟〉と『源氏物語』——初瀬信仰をめぐる浮舟の変貌——

第一章で考察したように、『源氏物語』の浮舟は、出家を果たしたにも拘らず、宗教的救済から遥かに隔てられた者として描かれていた。その浮舟は、『源氏物語』最後の女君浮舟をシテとする能〈浮舟〉においてシテに据えられ、初瀬観音との深い縁により救済へと導かれることになる。

第四章では、この〈浮舟〉を考察する。〈浮舟〉は、従来、『源氏物語』の本格的な理解に基づく作品と見られていたが、『源氏物語』の浮舟と〈浮舟〉のシテ浮舟の間には、初瀬観音信仰との向き合い方という重大な問題において、決定的な異なりが生じていることに注意が必要である。

『源氏物語』では浮舟と初瀬観音の不調和、さらには浮舟による初瀬参詣への拒絶が描かれている。物語の最後に浮舟が辿り着いた信仰の対象は、「阿弥陀仏」であった。

一方、〈浮舟〉のシテ浮舟は、天照大神・日吉山王と団体視される中世的な初瀬観音を渴仰し、その靈験によって救済される者として造型し直されている。前場の上ゲ歌やクセについても、従来指摘されているような『源氏物語』の浮舟物語の単純な美化・改変ということではなく、神仏習合観に基づく初瀬信仰を軸に、浮舟物語を構築し直したのとして解釈されるのである。

【第五章】浮舟と「初瀬」——解体される靈験譚、無化される靈験

第五章では、『源氏物語』と〈浮舟〉の異なりを際立たせるため、改めて『源氏物語』において、浮舟と初瀬観音がどのように切り結ぶのかを考察する。

『源氏物語』で初瀬観音はその靈験による浮舟の婚姻譚を形成しつつあった。しかし、その婚姻譚は、浮舟と周囲の確執によって解体されている。一方、こうした浮舟と周囲の確執の問題は、入水からの救出後の浮舟をめぐる申し子譚・婚姻譚を再び解体する反面、浮舟の出家譚については完成させるといふ、まことにアイロニカルな結果を導くことになる。ただし、出家後の浮舟は、初瀬観音の靈験に感じ入ることも、それを信仰の対象とすることもなく、自らの内面に湧き上がる愛執に苦悶し、そこからの逃避を目指して「阿弥陀仏」に縋ろうとする。浮舟を出家へと導いた初瀬観音の靈験は、物語において最終的に無化されていると言えよう。

『源氏物語』において、初瀬観音は浮舟の救い手ではなかった。さらに、浮舟の最後の抛りどころとなった「阿弥陀仏」でさえも、果たして出家後の彼女の救い手となり得るのか、という大きな疑問を投げ掛けたまま、物語は幕を下ろしてしまう。こうした出家後の浮舟の救済の問題は、能〈木霊浮船〉へと引き継がれることになる。

【第六章】〈木霊浮船〉試論——『源氏物語』の浮舟の女君の闇を担って——

第六章では、従来「拙作」や「術学的」とのみ評されてきた能〈木霊浮船〉を、『源氏物語』の浮舟像の享受という視座によって捉え直す。改めて〈木霊浮船〉を『源氏物語』の浮舟物語と突き合わせると、〈木霊浮船〉に取り込まれた浮舟の理解は、『源氏物語』の知識の披瀝という枠にはとどまらないものであることに気付かされる。

まず、前シテ浮船の像は、『源氏物語』の浮舟の出生や恋、出家にまつわる深い闇の面を抉り取りつつ造型されているものである。

次に、後シテが浮船ではなく、浮船に憑いた物の怪になっていることへの不審についても解決を試みた。〈木霊浮船〉では、シテ浮船も物の怪も、ともに出家者でありながら救済されずに苦悶するという同一の性格を見せる。この後シテのあり方は、出家は果たして救済に結びつくのか、という『源氏物語』の抱える重大な問題を提起するものとして注目される。

〈木霊浮船〉は、『源氏物語』の浮舟の人生が抱える暗く悲劇的な側面を掬い上げ、浮舟を中心とする出家者の妄執と救済を表現しようとした作品である。〈木霊浮船〉は、中世

的な『源氏物語』享受の世界を含み持つ点において、『源氏物語』との多少の異なりを見せつつも、物語の浮舟が抱える本質的な問題を忠実に取り込んで成り立つ作品であると結論づけられる。

【終章】

以上の論考を通じ、本論文では、『源氏物語』においてその宗教的救済が「絶望的」とされていた光源氏・浮舟が、能でいかなる新しい救済の物語を紡ぐのか、さらにはその新たな物語に、どのような中世の『源氏物語』享受と宗教的な論理が作用しているのかを浮かび上がらせることができた。その一方で、能作者と『源氏物語』の享受の実態については扱えなかった部分も多く、今後に取り組むべき課題として残されている。

今後は、こうした課題も視野に入れつつ、他の源氏能の作品において、『源氏物語』の登場人物たちの「絶望的」な宗教的救済のあり方がどのように取り込まれているのか、またいかに新しい救済の物語が構築されているのか、さらにはその新しい物語に躍動する中世的なダイナミズムとは一体何かといった問題について、さらに考察を進める予定である。